

ハンガルジャン・アルミネ研究員（アルメニア）



私はアルメニアから来たハンガルジャン・アルミネと申します。私は 1998 年にアルメニアの非常事態省国立地震防災研究所 (NSSP) へ入職し、現在は観測ネットワーク情報部で主任専門官として働いています。ここでの主な業務は、地震観測ネットワークから得られる様々なデータを蓄積するためのデータベース開発などです。私は日本での滞在中、データ分析や評価などについて学びたいと考えています。

アルメニアは、黒海とカスピ海の間位置する陸地に囲まれた国で、グルジア、アゼルバイジャン、トルコ、イランと隣接しています。アルメニアでは、地震や地滑りなどの自然災害が多発しており、また交通事故などの人的災害なども多く発生しています。その中でも地震は大きな課題となっており、多くの人命や財産を脅かしています。

地理的にはアルペーン-ヒマラヤおよびバルカン-カルパト地震帯に囲まれており、地震リスクが高い地域に位置しています。アルメニアにおいて、歴史上最も多くの被害をもたらした災害は、1988 年 12 月 7 日に発生したスピタク地震です。この地震では、アルメニア領土の 40%にあたる地域が被害を受けました。人的被害としては、約 514,000 人が家屋を失い、約 20,000 人が負傷し、約 12,500 人が病院に収容されました。死者数は約 25,000 人にも上りました。

この大地震の後、1991 年に NSSP が設立されました。NSSP は国内における地震のモニタリング、地震及び地震リスクの評価、地震リスクの減少を目的に活動を行っています。また、NSSP は設立以来、地震に関するリスク評価やリスク軽減に取り組む ADRC などの国際機関と連携し、活動を推進しています。

日本での滞在期間、私は他の客員研究員と共に多くの研究機関や政府関連機関を訪問したいと思います。例えば、1995 年に発生した阪神・淡路大震災からの経験や、他の自然災害について、そして、日本政府が地震時に対応した災害管理についても学びたいと思います。客員研究員プログラムを通じて得られる防災に関する知識は、NSSP の担当者を通じて同僚に報告し、適宜共有したいと考えています。

最後に、このような機会を頂いた日本政府並びにアルメニア政府に感謝申し上げます。